

令和2年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部
鹿児島県知事 優秀賞

「 7月豪雨からの学び 」

鹿児島県 長島町立平尾小学校 6年 ^{やました}山下 ^{こうが}煌月

「おばあちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だよ。」

電話から、いつもの祖母の声が返ってきて安心した。

「令和2年7月豪雨」と名付けられた今年の豪雨災害。この災害は、ぼくが住んでいる長島や祖母が住んでいる熊本県の八代にも大きなえいきょうを与えた。被害が34県に及び、人的被害114名、住家被害が約1万7千900件あったそうだ。この数にも驚いたが、ニュースで被害が大きかった地域の実際の様子を見てみると、川の水がはらんし、町が水であふれている様子が流れ、更にしょうげきを受けた。

ぼくが住んでいる長島にもたくさんの雨が降り、校区内ではがけ崩れが起きて、この災害を身近に感じ、とても怖い思いをした。亡くなったり、けがをしたりした人がいなかったことにほっとしたが、他の地域では、家が倒かいし住むところがなくなってぼう然としたり、家族を亡くして涙を流していたりする人たちがいた。ぼくたちの想像をこえるほどつらい思いをしている人たちのことを考えると、ぼくは胸が張りさけそうになるほど苦しく、悲しくなった。

ぼくの父は、役場で働いている。毎日仕事で帰りがおそいのに、ご飯を作ったり、そうじや洗たくをしたりと、母と協力して家のこともしている。また、ぼくたちが兄弟げんかをしたときは、いつも真剣にしかってくれる。何事も一生けん命な父の帰りが、最近は何におそく感じたので、どんな仕事をしているのか不思議に思い聞いてみた。すると、

「お父さんは、役場の耕地課で、道路や畑の修理などを申請してきた人のお手伝いをしているんだよ。最近、帰りがおそいのは、7月の豪雨のえいきょうで、道路や畑がたくさんこわれて、申請する人が多くなったからだよ。」

と教えてくれた。その話を聞いて、父は家での父としての姿とは別に、地域の人たちを助けるという役割を果たしていることを知った。

しばらくして豪雨が落ち着くと、ニュースの映像には、ボランティアの人たちの様子が流れた。今年の夏は暑くて、熱中症の危険性も高いうえに、コロナウイルスのえいきょうでボランティアに参加できる人たちが限られていた。だから、なかなか多くの人の手を借りることができず、同じ県内の人だけで活動しなければならない状況にあった。そんな大変な中でも、被害にあった人々のために活動している人たちを見ていると、父の顔がうかんできた。ボランティアの人たちと同じように、父も、被害にあった人たちが災害を乗り越えるためにサポートする一人なのだ。ボランティアや父のような人たちがいるから、大きな災害が起きて、悲しいことがあっても、少しずつ乗り越えていくことができ、社会が次の時代につながっていくのだ。でもなるべく、人々を苦しめるこのような災害は二度と起こってほしくないというのが本音だ。

ぼくは、物を作ったり、計算したりすることが得意だ。今は将来のことなんて、はっきりとは分からないけれど、この夏に感じたことを忘れず、得意なことを伸ばし、これからも学び続け、いつか父のような社会の役に立てる大人になりたい。